



うじいえ 自然に親しむ会

会報誌 第24号
令和4年4月1日
(2022年)



ごあいさつ

会員の皆様、令和3年度中は大変お世話になりました。2年度連続で新型コロナウイルスの猛威により、本会の事業の多くを中止せざるを得ない事態になったことに対しては、残念の一言に尽きます。ミヤコグサ第1・第2管理地、氏家大橋上流カワノギク保全地、サッカ一場西側礫河原保全地に加え、宇都宮側の「宇都宮シルビアシジミ保全会」の管理地、「上小倉保全地」を加えた除草作業は、ユースボランティアを含む参加者と「しなだれバスターズ」による機械除草で何とか維持されました。

また、会費納入の滞りにより活動費が厳しくなると思いましたが、前年の繰越を多くしていたため問題は発現せず、今後の活動の展開を踏まえて機材等を整えました。

まだまだ新型コロナウイルスの感染拡大が続いている状況ではありますが、今年度の活動を別添の活動計画のように、感染防止対策を徹底したうえで野外を主としたものとして実施していくたいと思います。今後は、鬼怒川中流域の河川環境を保全するNPO法人への移行を視野に検討を始めています。後ほど、その内容については案内したいと思います。

新型コロナウイルスの状況やウクライナに起因する世界情勢の不安定化は、決して楽観視できるものではありません。皆様におかれましては、まずは健康に留意していただきますよう、重ねてお願い申し上げます。



しなだれバスターズ（上小倉保全地にて）



ユースボランティア（第一管理地にて）

令和4年4月1日



うじいえ
自然に親しむ会

会長 高橋 伸拓



コロナ禍での活動を振り返る

本年度もまた、新型コロナウイルスの猛威に振り回された一年でした。しかしながら、コロナ禍2年目であり、対応の方法などが徐々に見えてきたことで、管理活動の多くが実施でき、各種観察会等も緊急事態宣言下を除き提供することができました。また、向溜の堤体復旧とアカガネネクイハムシの繁殖確認、宇都宮市の上小倉保全地の管理作業への協力、宇都宮市環境大学への講師、Radio BERRY「エコラジ」の収録・放送、ろまんちっく村の生きもの関連事業への協力、喜連川社会復帰促進センターのサステナブルプリズン事業への協力、勝山公園の再整備ではアズマヒキガエルのためのビオトープ造成、カワラノギク再生に向けた実験区の造成など、精力的に行動できたのではないかと思います。

さらに管理作業では、これまでにないほど機械除草部隊「しなだれバスターズ」が活躍し、刈払い除草のみならず特定外来生物指定の「ハリエンジュ（ニセアカシア）」の切り倒し、カワラノギク実験区の整備、ミヤコグサ第2管理地の柵の補修など、大きな役目を果しました。

それぞれの活動は、下野新聞をはじめ多くの方々に注目していただき、大変ありがとうございました。



交尾中のアカガネネクイハムシ



保全地に出現したアズマヒキガエル



保全地と動植物のいま

【ミヤコグサ第1管理地・第2管理地】

ミヤコグサ第1管理地は、依然としてミヤコグサの生育数が少ない状況が続いています。しかし、草丈の高い範囲では、ある程度の生育数が確認されており、その理由が日射の強さで裸地部分が枯死し、草本で覆われた範囲が生育適地に近い状況になったと考えられます。現在、地表面温湿度を経時に測定中で、どのような生育状況が現在の環境下で適しているかを研究したいと思います。ホームページから現在の保全地の状況を写真で見ることができますので、是非ご覧になってください。



ミヤコグサ第1管理地の様子

一方、第2管理地では、令和3年の開花時期に劇的に少なかった状況を踏まえ現地確認しましたが、多くの実生個体が発芽していました。今後は、保全地内での開花のみならず、採取したタネを河原に播くことで本来の鬼怒川の風景を復元していきたいと思います。

【氏家大橋上流カワラノギク保全地】

上記の第2管理地同様、開花数が激減した当保全地では、実生個体が少ない心配が残りました。そこで、10m×10mの範囲でツルハシによる掘り起こしを行い、タネを撒き、生育状況を観察することにしました。また、国土交通省下館河川事務所の協力により、一部の天地替えを実施することとしました。第2管理地同様、多くのカワラノギクが咲き乱れる地域になるように努力していきたいと思います。



【サッカー場西側礫河原保全地】

草の繁茂が激しい当保全地ですが、ミヤコグサの生育が良好になりつつあります。多く繁茂する周辺のススキやクズを「しなだれバスターズ」が刈り払うことでタネの飛散を押さえたり、特定外来生物のハリエンジュを切り倒したりと、周辺環境の整理に力を入れました。現在でも草本が被覆する状況ではありますが、改善の兆しが見え始めました。

今後は、氏家大橋上流保全地のように天地替えを念頭に入れ、その効果の検証もする方向で考えています。





再生！勝山公園

2021年12月5日、勝山公園の再整備に合わせてビオトープ「アズマヒキの池」を整備しました。台地のために止水域が少ない当地でも、アズマヒキガエルがごく少数確認されています。本種は、市内でも生息地が減少しつつある傾向ですので、今後、産卵場として機能することを楽しみにしています。また、その他の水生昆虫にとっての生息場としても有効と考えています。

また、ビオトープ周辺は「桜の見本園」として整備中です。開花が進みつつある季節ですが、新たな桜の名所として賑わう日も楽しみですね。



造成が完了したビオトープと参加者



ビオトープ「アズマヒキの池」



特定非営利活動法人(NPO法人)を目指して

20年目を迎える本会は、更なる河川環境保全の深化を目指し、鬼怒川中流域の礫河原環境の保全を目指したNPO法人化を検討しています。基本的な路線が一致し、対岸で活動する「宇都宮市シルビアシジミ保全会」と合流し、本年中の立ち上げを目指しています。

現行の「うじいえ自然に親しむ会」と「宇都宮市シルビアシジミ保全会」は、作業グループとして存続させることとします。詳細な枠組みや会員制度等につきましては、内容が固まり次第、皆様に通知しますので、今後ともご支援をよろしくお願ひいたします。



編集後記「生物多様性を守る、自然環境を保全する、とは？」

【生物多様性】は、「遺伝子」「種」「生態系」の3つで構成されると広く説明されています。それぞれが難しいことですよね。本会の活動から考えると、鬼怒川中流域に生息するシルビアシジミは、通常の蝶より数が少なく、生息範囲が狭い特徴があります。これは「遺伝子の多様性」が損なわれることにつながってしまうため、離れた場所に保全地を設定しています。また、鬼怒川河川敷に生息する生き物の多くが絶滅危惧種となることから、「種の多様性」が低下する可能性が強くはらんでいたため、17種の希少動植物種を設定して保全するようにしています。さらに昔のように暴れなくなった鬼怒川は、シナダレスズメガヤをはじめとする外来植物の影響もあり、礫河原環境が維持されずに「生態系の多様性」のバランスが崩れてしまっているため、関係機関連携の下で環境改善に努めています。本会では、以上のようなことを考えつつ、日々の活動を行っています。